Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-08

漱石とオカルト : 初期翻訳「催眠術」(Ernest Hart, M.D.)を巡って (特集 明治初期の翻訳・翻案文学 : もう一つの近代文学の源)

西村, 好子

(Citation)
國文論叢,38:14-23

(Issue Date)
2007-07

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011613

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011613

漱石とオカルト

――初期翻訳「催眠術」（Ernest Hart, M.D.）を巡って――

西村好子

はじめに

若き英文学徒・弱冠二十五歳の夏目金之助は、無署名で『哲学会雑誌』（明二五・五）に、アーネスト・ハート「催眠術」の翻訳を未完のまま発表し、踵を接するように「老子の哲学」（明二五・六）を東洋哲学の論文として執筆した。

次に改名した『哲学雑誌』の編集委員になった漱石は、「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト、ホイットマン』Walt Whitman の詩について」（明二五・十）を「雑録」欄に無署名のまま発表した。英文学科の学生として、この論文はいかにもと納得させられるし、漢文育ちをしのばせる「老子の哲学」も漱石らしい。

だが、オカルトと近接する「催眠術」の翻訳は、奇妙な違和感を与える。完成している二論文に対して、未完成のままで発表という形態において、その違和感を漱石は表現したといえようか。

さりながら、坪内逍遥に激賞されたという「ホイットマンの詩について」の延長線上に、大学院に入学し英文学者になる道が敷かれていたとしたら、「催眠術」翻訳が、小説家漱石を誕生させる密かで豊かな源泉の一つとなったのではないかと思われる。

一

なぜ、漱石はオカルトに近い「催眠術」を翻訳したのだろうか。その疑問を解くために、まず当時における「催眠術」の位置について考えてみたい。明治日本は、現在と匹敵する脳の時代であって、脳の休息である睡眠や、睡眠している際の夢にも視点があてられ「催眠」にも関心が拡大していったようだ。「明治二十年前後には、催眠術はかなりポピュラーな流行現象になりつつあった」[1]という。

権威ある東京帝国大学文科大学の研究発表誌・『哲学会雑誌』が、催眠術関係の翻訳を堂々と掲載しているのは、今の私たちに不思議な感じを与える。けれども、「科学とオカルトの明治日本」（長山靖生『千里眼事件』二〇〇五・十一　平凡社新書）においては、西洋から移入されたばかりのこの二分野の仕切りが明確ではなかったらしい。

それは、日本ばかりではなく欧米においてもであって、催眠術

研究によって「脳髄生理を合理の法で解明す」（金之助訳）というハートの言からも、感じとれる。「脳髄生理」という翻訳語自体、催眠術への関心が大脳生理、ひいては脳と精神への科学的アプローチであることを語っている。

怒濤の如く西洋から移入される様々なもののうち、散歩などの身体技法とともに、精神が現在を引き裂ける不思議なものとして登場してきたのである。それを間接的に、川村邦光は狐憑きの分析を通して次のように述べている。

もはや心や霊魂ではなく、精神の分析、それも神経や脳に極限された分析が進行していくことになる。（『幻視する近代空間―迷信・病気・座敷牢、あるいは歴史の記憶』一九九〇・三　青弓社）

儒教道徳で薫育される「心」や死後も生き続ける「霊魂」ではなく、現在を認識し表現する精神や神経がヒステリーや狂気とともに移入されつつあったと推測される。「神経」や「脳」の時代がやってきたのである。

圓朝の怪談噺「真景累ヶ淵」（速記刊行　伝・明二一）の「真景」は「文明開化がうたわれていた当時の新感覚語であった『神経』にひっかけた[2]」ものであった。圓朝は、「幽霊と云ふものは無い、全くの神経病だと云ふことになりました」という幽霊談義を長々と枕に振ってから、本題の怪談噺に入っている。その否定された幽霊が、噺の中で次々と出現してくる有り様は、ヴィクトリア朝最大の小説家・ディケンズの作品にもあり、あのイプセンのにもあるという「十九世紀に隆盛した幽霊小説[3]」という英文学を想起させる。

一方欧米では、「催眠術」や「スピリチュアリズム」が医学者を中心に構築されていく。それは、ダーウィンの進化論が、世間を席巻し、科学的合理的思考の歯車のなかに人々が巻き込まれて行く風潮のなかで、不可解で不合理なもの（幽霊や狂気など）が、逆照射されることになったのだろう[4]。その反映を、翻訳文中に見出すことができる。

例えば、催眠術の「提起法（Suggestion）」によって、「狂者を正気に復せり」と施療の例が紹介され、さらに、催眠術の「研鑽探求」は「半ば哲理に関す」（金之助訳）と意義づけられる。

つまり、現在私たちにとって、オカルトに近い催眠術が、明治日本では『哲学会雑誌』掲載で自明のように精神医学と脳科学と哲学とに近い位置にあって、「一種不可思議のもの」・「狂気」への対処療法となろうとしていた。そこに漱石の関心の核があったのではないだろうか。注解は、「敢えて憶測を試みるなら、理性や意識を超える心理に対する漱石の関心と探求の一端を示すものとでもいえようか[5]」と述べている。

私としては、後に「人生」（明二九・十）で明瞭にされる「吾人の心中には底なき三角形あり、二辺並行せる三角形あるを奈何（いかん）せん」という「一種不可思議のもの[6]」の自覚に連動していたのではないかと推測したい。

では、「一種不可思議のもの」とは何なのだろうか。金之助は、欧米文学のゴシック小説の「出来事」や物語詩の妖怪やマクベスの幽霊やホーソンやポーの怪奇を否定し、「因果の大法を蔑にし、自己の意思を離れ、卒然として起り、驀地（ばくち）に来るものを謂ふ、世俗之を名づけて狂気と呼ぶ」（「人生」）と説明している。

さて、オカルトと科学ばかりでなく哲学までが、混沌としていたこの時期に、催眠術は科学でもなく、哲学でもなく、「狂気」への解明にもなり得ず、「感応」という主観的思い込みに過ぎないという一応の結論を得て、中途でこの翻訳に見切りをつけた金之助は、大学生にして見識があったというべきだろう。

彼が「催眠術」の翻訳を未完のままにして「老子の哲学」を執筆したのは、「一種不可思議のもの」である「狂気」へ哲学によって接近しようと意図したからではないだろうか。

その頃の対話の相手が親友・米山保三郎である。彼は金之助と共に、「批判的実在論の立場をとる」[7]ドイツの哲学者ブッセ（Ludwig Busse）に学び、大学院で「空間論」を研究中に、明治三十年に亡くなった。後に『吾輩は猫である』（明三八・一～三九・八　以後『猫』と省略）において「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫（ああ）」（三）と悼まれる曾呂崎のモデルとなっている。

明治二五年九月上旬または中旬、米山保三郎と金之助はヘーゲルや東洋の哲学に関して議論を重ねている。その成果として米山は、「老子の哲学」において金之助が「老子とヘーゲルの差異を論じた点を批判修正」[8]し、「ヘーゲルノ弁証法ト東洋哲学」（明二五・十一）を、『哲学雑誌』に発表した。二人の哲学談義がいかに創造的なものであったかを彷彿とさせる。

哲学青年・米山保三郎と青春を生き、建築家志望であった金之助は、彼に勧められ文学の方向へ舵を切り、子規と親交を深め俳句を作る文学青年に転身する。この転身の分岐点にそっと置かれたのが、「催眠術」の翻訳であり「老子の哲学」であろう。

大学院修了後、松山中学校教員を経て、第五高等学校講師となった金之助は、大量の俳句を作句して子規に添削を乞いつつ、世間で流行し始めた催眠術に背を向け、「人間が人間の主宰たるを得」（「人生」）ることはできないと哲学に対しても疑問を持ち、彼の存在の不安ばかりが響いて来る次のような一文を発表している。

夢は必ずしも夜中臥床の上にのみ見舞に来るものにあらず、青天にも白日にも来り、大道の真中にても来り、衣冠束帯の折だに容赦なく闖（たつ）を排して闖入し来る、機微の際忽然として吾人を愧死せしめて、其来る所固より知り得べからず、其去る所亦尋ね難し、而も人生の真相は半ば此夢中にあつて隠約たるものなり（「人生」）

この頃、存在論的不安を美的幻化のなかに結晶させて、代表句とされる句を詠んでいる。[9]

人に死し鶴に生れて冴返る　　明三〇
或夜夢に雛娶りけり白い酒　　〃
菫程な小さき人に生れたし　　〃
仏性は白き桔梗にこそあらめ　　〃

西洋と東洋、英文学と俳句という漱石内部の相反するベクトルは、晩年の『明暗』（大五）執筆時の午前中は小説、午後は漢詩の制作にまで持ち越されることになる。では、次に具体的に翻訳「催眠術」をみていきたい。

二

漱石が翻訳した「催眠術」は、Ernest Hart “Hypnotism, Mes-

merism & Witchcraft" の中に収録されている。初版が一八九三年で、私が参照したのは、カナダで覆刻された第二版で一八九六年発行の二百十二頁のペーパーバック[10]である。表紙と裏表紙とも正装した男に催眠術をかけられようとして、青い玉を見せられ目をむいている美女の派手な装丁で、いかがわしい感じすらする。が、内容は催眠術、テレパシー、動物磁気（電気）などを科学的に探求し霊媒現象については批判的な立場をとる研究書[11]だ。

漱石の「催眠術」（「トインビー院」演説筆記）翻訳（一八九二）は初版が出版される一年前なのだから、恐らくはハートが一八八六年から一八九八年まで編集長をした『イギリス医学雑誌』に掲載された、講演速記録からの翻訳であろう。英国から遠く離れた東洋の小さな国の極めて敏速な反応に驚かざるを得ない。

漱石が翻訳したのは、ハートがトインビーホールで "HYPNOTISM AND HUMBUG"（催眠術とペテン）という題で講演した巻頭の第一章で、その途中で、ぶつりと切れていて未完で、題の「ペテン」は省略されている。なぜ、省略したかといえば、先述したように催眠術がオカルトよりも脳科学や哲学に近いという距離の取り方での漱石の翻訳であったからだろうか。「想像力のある哲学者」が興味を持つ「今、大変知的で注目される現代の探求の主題」（拙訳）である「催眠術」の金之助訳は、漢文訓読体で格調高く次のようにに始まる。

幽玄は人の常に喜ぶ所なり。幽玄の門戸を開いて玄奥の堂を示す者あれば衆翕然（きゆうぜん）として起つて之に応ず。智者も此弊を免かれず昧者は勿論なり。

冒頭の「幽玄」は「THE unknown」の訳で、次のように続く。

今の世に之を催眠術、『メスメリズム』、動物鑷気（じようき）術、読心術、伝心術抔と称す。其古へ人智未だ開けず合理の法を以て自然の現象を解析するに拙なりしに方つては「メヂアン」の幻術、狐憑の怪、禁呪の験抔と云ふ大抵似た者なるべし。

「マジシャンの技」（拙訳）を「『メヂアン』の幻術」としており、注解では「ギリシャ神話の王女『メーディア』の魔術」（山内久明　前出）となっている。しかし、「幻術」とは、「催眠術が移入される以前に、日本固有の『術』として伝えられ」、「妖術、魔法をあらわす語」（一柳廣孝　前出）である。後に『琴のそら音』（明三八・六）の有耶無耶道人著『浮世心理講義録』に、「日本固有の奇術」として登場する。

ここで注意したいことは、「悪魔や悪霊にとりつかれての滑稽な動作」（拙訳）を「狐憑の怪」と意訳していることだ。「狐憑き」という現象そのものが日本にしかない（川村邦光・前出）のだから、当然原文には「狐憑の怪」という語はない。漱石が、キリスト教における「悪魔や悪霊」を、民話に出てくる「狐」と置き換えたのである。

また、原文にある「悪魔払い、悪霊の駆除、手の殴打による悪霊からの救い、魔女による幻覚症状への裁判」（拙訳）などを「禁呪の験抔」と一語にまとめている。「悪魔や悪霊」「魔女」によるものを「呪われる」という日本古来からの人間の行為に転換しているわけで、文化の衝突である翻訳を、日本の文化に沿って解消しようとしたといえよう。

次に、ハートがなぜ、催眠術に興味を持ったかを述べる。それは、骨相学協会を創立したエリオットソン（一七九一～一八六

八）による。エリオットソンが、ハートの親戚の慢性関節病を催眠術で治したからである。しかし、エリオットソンは、この催眠術施療によって、ロンドン大学臨床医学教授辞任を余儀なくされる。注解によれば、以後、催眠術病院を設立し（一八四九）、催眠術雑誌を発刊する。

また、メスメリズムと呼ばれることになる催眠術の創始者・オーストリアの医師・メスマー（一七三三～一八〇五）の紹介もある。彼も、パリ大学医学部に糾弾され追放される。アメリカでは、グライムス（一八〇七～一九〇三）が、「電気心理の名」で合衆国議会下院で演説し、その書『電気心理論』が英国に輸入され、それを学習したハートが、催眠術に手を出し、医事委員に呼び出され審問を受け、科学的に説明したが理解されず二度と施療しないことを条件に許される。

欧米での催眠術の人気の高さが窺えるのだが、科学ではないと催眠術を非難する者も多く、フランスの啓蒙主義思想家・ヴォルテールは、次のように非難している。

吾れ能く鬼を役し吾れ能く魔を使ふ抔と大言を放つ者己れの無智なるより現象に関係なき名目を捏造して仕たり顔なり（金之助訳）

「理解できない現象に意味のない名前をつけて他人に結論を押しつけ、自らの無智を飾りたてる」（拙訳）神秘主義者とペテン師の傾向を、「鬼」や「魔」を登場させての意訳は、日本人の想像力に訴えかけて金之助の翻訳姿勢の面目躍如というところだ。

ハートは、このヴォルテールの言葉を謙虚にうけとめ、なぜ人が催眠術に掛かるのかを、「合理の法」で解こうとして、「電気的なものか磁気的なものか確かめ」ようと「支配実験」を行い、ケントの少女に催眠術を掛けた例を分析して、「感応ありと信じたる少女」（金之助訳）には十分通じると次のように結論する。

去れば俗に所謂鐳気睡眠、生物電気、奉信入定抔と小六（こむ）づ箇敷（かしい）御大層なる名を付するものも一たび其源頭に逢着すれば単に主観的の情況に過ぎざるなり。（中略）若し幾多の方便を以て被術者の想像を感ぜしめ又其体性を動かすを得ば施験者なくとも実際同様の結果を生ずべし。（未完）

ここで金之助の翻訳は切れている。「不可思議のもの」を解明できなかったにしても、催眠術が、想像を含めての「主観的の情況」による「感応」であるという結論を得たことは、以後の英文学研究に生かされ、さらに小説創作の豊かな源泉となったのではないだろうか。また、欧米の小説に扱われている、「感応」を越えた、超能力、メスメリズム、動物磁気（マグネティズム）、電気心理などの超自然現象・オカルトの位置を把握できたのは、大きな収穫であっただろう。

当時の英国で、超能力というオカルトを採り入れてベストセラーになっていたのが、小説『エイルヰン』であった。早速に、漱石は「小説『エイルヰン』の批評」（「ホトトギス」明三二・八）を発表する。この批評から粗筋をたどってみると、「『ジプシー』専売の幽冥術」という超能力によって生き別れとなっていた恋人たちが出会うことができたという神秘的なラブストーリーだ。「幽冥術」とは、「『クルス』と云ふ胡弓の様な、『ジプシー』特有の楽器を弾ずると、山神の威霊で、尋ぬる人の生霊が現はるゝ」（「小説『エイルヰン』の批評」）という術で、岩の上で、「紅なる

衣」を着た女が、「知らぬ世の楽器を弾くともなしに弾いて居る」という『幻影の盾』（明三八・四）を彷彿とさせる。[12]

現在では二流と位置づけられる『エイルキン』が、当時の英国では「沙翁の『オフェリヤ』以後、『キニー』（巻中の少女）の如き悽絶なるものなし」（「小説『エイルキン』の批評」）とさえ評価されていた。それを受けて漱石も、『文学論』（明四〇・五）において『ハムレット』の幽霊や『マクベス』の妖婆と並べ「或は近時有名なる小説 Aylwin 中の不可思議分子」（第一編第三章）と併記している。[13]

十九世紀欧米では、『エイルキン』のようにオカルトを扱った小説や幽霊小説が浮上し、動物磁気やメスメリズムを小道具に使ったり、世界観として使った小説が流行していたらしい。そんな小説の一冊・ホフマン『牡猫ムルの人生観』（一八二〇～二二）を、ドイツ文学者・藤代素人が、『新小説』（明三九・五）誌上冒頭で紹介している。

題は「猫文士氣焔録」、著者は「カーテル、ムル口述　素人筆記」で、ムルの幽霊が現れ、着想を「『猫ばゞ』にする」と怪気炎を上げ、「夏目の猫」に著作権を持ち出し嫌味を言い、「『人間ばゞ』と改正するが良い」と漱石を批難している。漱石は、最終章で「カーテル・ムルと云ふ見ず知らずの同族」（十一）と話題に挙げているだけで、その着想を否定している。

この否定の背後には、漱石自身の苦い留学体験が潜んでいるだろう。若き金之助は、英文学研究のとば口で英文学とは関係のなさそうな「催眠術」を翻訳し、催眠術とは「感応」という主観的なものらしいという感触を得ていた。

留学前の「小説『エイルキン』の批評」の根底には、なぜ「感応」を越える超自然現象を扱う文学が欧米で二十版を越すベストセラーになるのかという疑問がある。この疑問を抱いたまま留学した漱石は、心霊学や催眠術が流行する英国[14]に幻滅し、漢学によって培われた文学と西洋の文学との懸隔に絶望し（『文学論』序　明三九・十一）、文学のかたちを追求せんとし、『文学論』（明四〇・五）の構想を企て、果ては神経衰弱を患うのだ。

いわば、身体をかけて、異文化をつなげようとした漱石には、『牡猫ムルの人生観』というたった一冊の本からの着想ではないという自負があり、ムルの幽霊を出現させる素人の発想に西洋の匂いをかぎつけ、嫌悪すら感じたかもしれない。

英国留学から帰国後、「感応」や催眠術、心霊学、テレパシー、超能力などのオカルトが、自家薬籠中のものとして、いきいきと展開されるのは、『猫』と『漾虚集』（明三九・五）である。

『猫』の大きな枠組み[15]は、あの世の子規と「始終無線電信で肝胆相照らして居」（十一）るテレパシーということになるし、『漾虚集』は、オカルトの流行する英文学を許容できる空間と時間に宙づりにして再構成した作品集ということになるだろう。

三

『猫』から分析していきたい。『猫』は、小説の構造として、迷亭・寒月・苦沙弥などが繰り出す「挿話の連鎖」（竹盛天雄　前出）であって、（二）において迷亭は「首懸の松」の不思議さを語り、寒月は「吾妻橋」での体験を語り、最後に苦沙弥が神経を起こし、「摂津大掾」の義太夫節を聞きに行けず妻の願いをかな

えてやれなかった話をする。苦沙弥は二人の話に水を掛け、反「感応」の話で相対化しているのだ。

迷亭と寒月の挿話に通底するのは、「人間の感応」（二）「霊の交換」（六）で、迷亭は次のように締めくくる。

（前略）ゼームス抔に云はせると副意識下の幽冥界と僕が存在して居る現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだらう。実に不思議な事があるものぢやないか（二）

「ゼームス」ことウィリアム・ジェームス（哲学者・心理学者一八四二～一九一〇）を、漱石は高く評価しており、『思ひ出す事など』三（明四三・十一）では、彼の死を深く悼んでいる。「副意識」は潜在意識で、「幽冥界」は無意識ということで、まだ訳語も定まっていない、心理学のかたちが不明瞭な時期であったことをよく表している。また、迷亭や寒月の心理学的オカルト的話題の間に挟まれているのが、苦沙弥の翻訳「巨人引力」という万有引力の話題である。オカルトと科学とは一線を画すべきなのに同列に扱われているのは、両者の混交した世相の反映であるし、漱石に両者を並列する批判的視点があったことを物語る。

つまり、私生活の鬱屈を下敷きにして、文明化せんとしてオカルトと科学の移入に奔走する知識人批判と戦争までも真似て近代化を急ぐ国家体制への痛烈な批判が、『猫』の特異な作品構造である「作者―猫、猫―作中人物」の「二重に固い間隔」[16]をしっかりと支えたのであろう。

執筆一年前に「無人島の天子とならば涼しかろ」（明三七）と詠んだ漱石は、『猫』において鬱屈と批判を爆発させているのだから、苦沙弥は当然のこととして甘木先生の催眠術にかからない。心理学的なものもオカルト的なものも科学も日露戦争さえもが、痛快にサタイアされている。

これに相反して、「狐憑の怪」（「催眠術」）と結んでロマンスとして小説化したものが、『琴のそら音』（明三八・六）である。

漱石は、『文学論』の第二編第三章「fに伴ふ幻惑」の中で次のように述べる。

（三）超自然的F。(1)宗教的F、其Fは時と国とにより異なること勿論なれど、これに伴ふfは概して同様なりとす。（中略）(2)宗教的ならざる超自然的F、例へば妖怪変化、妖精、妖婆其他同様類似のFにつきては其fも各々特色を有するものなれども、こゝには詳述の余白なし。由来此方面は所謂浪漫派文学と関係深きものなれば、一応の注目を値すべし。

この文学理論を援用すれば、『琴のそら音』は「宗教的ならざる超自然的F」の場合で奔放な想像力を駆使する「浪漫派文学」として構想されていることになる。漱石がサタイアもロマンスも書いたということを高く評価する見方がある。[17]けれども、「何となく英文学に欺かれたるが如き不安」（『文学論』序）を解消し、文学というかたちを構築するためには、相反する形式をとって書いていくしかなかったのではないだろうか。当時の漱石の鬱屈を晴らすには、どちらの形式も必要であったのだ。次に、ロマンスとして書かれた『琴のそら音』について具体的に考えていきたい。

『琴のそら音』の主人公・「余」は、法学士で、幽霊など信じない合理的精神の持ち主である。しかし、心理学の得意な友人である文学士の津田君から、彼の愛読する「幽霊の本」に掲載されている、死んだ妻の幽霊がロシア戦線にいる夫に会いに行ったとい

う話を聞いて驚く。一方で、手伝いの迷信深い婆さんの「犬の遠吠え」から何か「変」があるに違いないという占いにひきずられて、結婚前の「余」にとっての「変」とは「婚約者が死ぬかもしれない」ということしかないという強迫観念に取り込まれる。結末は、はぐらかされるように、婚約者には何の異常もなく、逆に彼女が朝早く見舞いに来た「余」を心配し、愛を深めるという話になっている。

この時期、大塚英志によれば、「『怪談の時代』とでも言うべきような思潮があった」（『「伝統」とは何か』二〇〇四・十　ちくま新書）らしい。

しかし、漱石は明確にその思潮と一線を画しているだろう。それは、『琴のそら音』一編にも現れており、「浪漫派文学」の約束の一つとして「超自然的F」が実在するように展開していってもいいはずなのに、作品の時間が現在で、場所が日本という設定なので、「超自然的F」めかしながら、最終的には、それを突き放し、強迫観念という心理に凝縮していっていることで自明であろう。つまり、「浪漫派文学」の構成要素である偶然宿命的な誤解の方に切り替えているのだ。

「琴のそら音」という題にしても、『エイルキン』のなかの「幽冥術」の「例の胡弓」の音から連想されたもので、そらみみ、つまり幻聴・幻覚のことなのだから、[18]怪談の流行に冷や水をかけていることになる。

「余」の友人は、大学で研究にいそしんでいる知識人である。その津田君が真剣に幽霊を信じていると言うこと自体、『猫』の知識人批判に通じる。この批判を凝縮したのが、知識人を狸と擬人化し、そういう作者もまた狸であるという、有耶無耶道人著『浮世心理講義録』の紹介である。

すべて狸一派のやり口は今日開業医の用ひて居りやす催眠術でげして、昔しから此手で大分大方の諸君子を胡魔化したものでげす。西洋の狸から直伝に輸入致した術を催眠法とか唱へ、之を応用する連中を先生抔と崇めるのは全く西洋心酔の結果で拙抔はひそかに慨嘆の至に堪へん位のものでげす。何も日本固有の奇術が現に伝つて居るのに、一も西洋二も西洋と騒がんでもの事でげせう。（『琴のそら音』）

「げす」調の文体は、江戸語では「ございます」だが周知の通り滑稽本の会話に多用される話し言葉である。「浪漫派文学」という形式を破って、漱石の本音であるようにサタイアが文体として尻尾を出しているのだ。

しかし、この本音には、初期翻訳「催眠術」を始めとしてのかなりの裏打ちがある。ロンドン留学時代の明治三十四年から、帰国後の明治四十三年くらいまでの十年ほどの間に「アンドリュ・ラング『夢と幽霊』、フランマリオン『霊妙なる心力』、オリヴー・ロッヂ『死後の生』」といった、オカルトやスピリチュアリズム関係のものを漱石は読んでいる（『思ひ出す事など』十七）。さらに、『人格とその死後の存続』の著者マイエルや心霊研究家ポドモアへの言及もある（同前）。

しかし、狸の一人称で自在に語られる『浮世心理講義録』からは、オカルトに引っ張られた気配は感じられないだろう。その上「余」は、「昨夜は全く狸に致された訳かな」と自分に「愛想をつかし」ている。また、『猫』においては、そんな読書傾向の漱石

が、催眠術の本を熱心に読み興味を示す苦沙弥として戯画化されている。

その一方で、「霊の感応」は、『幻影の盾』（明三八・四）『薤露行』（明三八・十一）『趣味の遺伝』（明三九・一）でも展開され、『琴のそら音』を含めて『漾虚集』（明三九・五）（他に『倫敦塔』『カーライル博物館』『一夜』）にロマンスとしてまとめられた。[19]

さらに、ウィリアム・ジェームスの『多元的宇宙』の未読部分の約半分を修善寺の大患（明四三・八）の直後なのに、三日間で読了している（『思ひ出す事など』三）。ウィリアム・ジェームスは、科学のみではなく、霊的な世界にも言及しスピリチュアリズムを含めての宇宙を考えていこうという姿勢を示して、『多元的宇宙』を書き残した。漱石の言葉でいえば「反理知派」である。

胃潰瘍の当時の治療として温めた蒟蒻を胃部に載せ、仰向けになった不自然な姿勢での読書にもかかわらず、死んだかもしれない自分を担保として熱い思いの中で『多元的宇宙』に熱中したのであろう。巷では、日本史上最大のオカルト「千里眼事件」（明四三・九）で沸きブームとさえなっていた。

しかし、漱石は、結局「反理知派」の方にはいかなかった。それを言外に語っているのは、『変な音』（明四四・七）であろう。

自分の病室の隣から妙な音がする。この妙な音は、いかにもミステリアスに描かれている。後で、直腸癌で入院した男が、看護婦にキュウリをすらせていた音であることがわかるのだが、その亡くなった隣室の男も隣から聞こえてくる変な音を気にしていた。実は、それは毎朝自分が髭を剃るため、剃刀を自動革砥へ掛け磨ぐ音だったのである。生死の狭間にいる二人の男が聞く不思議な音を、「超自然的F」にせず、種明かしをし、運命のアイロニーに転位している。『琴のそら音』の「そら音」は、六年後「妙な音」から「変な音」になったのである。

終わりに

初期翻訳「催眠術」は、オカルトと科学、スピリチュアリズムと精神医学、心霊学と心理学などの渦巻くるつぼの中に漱石がいたということを如実に示してくれる。この翻訳から、引き出されて来た超自然現象・オカルトが、『猫』と雁行して創作された『漾虚集』に通底している。『文学論』でいうところの「超自然的F」をたたきのめした『猫』のサタイアとロマンスとして生かした『漾虚集』とは、表裏一体として把持するべきであって、表は漢文、裏は滑稽本という江戸時代の文学の在り方と拮抗していると言えよう。

ゆえに、西洋に飲み込まれないで、西洋の文化の総体と取り組み、文学のかたちを理論と実践のなかで追求することが出来たのである。その追求の突破口となったものの一つが、若き日の初期翻訳「催眠術」であったと言えよう。

注

（1）一柳廣孝『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉―日本近代と心霊学』（一九九四・八　講談社選書メチエ）による。

（2）矢野誠一『三遊亭圓朝の明治』（一九九一・七　文春新書）による。度会好一『明治の精神異説―神経病・神経衰弱・神がかり』

（二〇〇三・三　岩波書店）にも同様の記述がある。

（3）・（4）　富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』（一九九五・一　青土社）による。

（5）　山内久明注解『漱石全集　第十三巻』（一九九五・二　岩波書店）による。

（6）　「人生は心理的解剖を以て終結するものにあらず、又直覚を以て観破し了すべきにあらず、われは人生に於て是等以外に一種不可思議のものあるべきを信ず」（「人生」）による。

（7）・（8）　荒正人著『増補改訂漱石研究年表』第二版（一九八四・六　集英社）による。

（9）　拙稿「漱石の俳句世界―作家漱石に至るまで」（『散歩する漱石―詩と小説の間』所収　一九九八・九　翰林書房）に詳しく論じた。

（10）・（11）　Ernest Hart, “Hypnotism, Mesmerism & Witchcraft” (Toronto ; Coles Publishing Company, 1980)、オリジナルタイトルは、“Hypnotism, Mesmerism and the New Witchcraft” (London ; Smith, Elder & co., 1896)、第二版の覆刻である。初版との違いは、最終章と付録を付けたことで、初版については佐々木英昭「『暗示』実験としての漱石短篇―「一夜」「京に着ける夕」『永日小品』の深層―」（「日本近代文学第七六集」二〇〇七・五）が既に注において紹介されている。覆刻本は、舞鶴高等工業専門学校教員吉永進一氏からお借りした。また拙稿について丁寧な御助言を戴いた。著書に『催眠術の黎明・近代日本臨床心理の誕生・1～7』（二〇〇六・一　クレス出版）などがある。

（12）・（13）　竹盛天雄「『琴のそら音』……二段構成の語り」（『漱石文学の端緒』所収　一九九一・六　筑摩書房）に、既に指摘されている。

（14）　「漱石が留学したヴィクトリア朝からエドワード朝にかけての英国では、心霊学や催眠術は、空前のブームを呈していた」（長山靖生『鷗外のオカルト、漱石の科学』一九九九・九　新潮社）による。

（15）　拙稿「子規と『吾輩は猫である』」（前出）に詳しく論じた。

（16）　相馬庸郎「漱石と写生文」（『子規・虚子・碧梧桐―写生文派文学論』所収　一九八六・七　洋々社）による。

（17）　絓秀実『日本近代文学の〈誕生〉―言文一致運動とナショナリズム』（一九九五・四　太田出版）第八章が、詩と小説という相反するジャンルに注目している。

（18）　注（12）と同じ。

（19）　柄谷行人『定本柄谷行人集―日本近代文学との起源』（二〇〇四・九　岩波書店）の「『漾虚集』はロマンスなのである」（第七章）による。

テクストは、『漱石全集　全二十八巻』（岩波書店　一九九三～一九九九）を使用した。ふりがなは適宜省き、旧字体は適宜新字体に改めた。

（にしむらよしこ／神戸大学非常勤講師）